

焼畑，棚田，マレー・コネクション
—— ミャンマー・チン丘陵における資源利用と経済階層 ——

高 橋 昭 雄*

**Swiddens, Rice Terraces, and Malay Connections:
Resource Use and Socio-economic Strata in the Chin Hills, Myanmar**

TAKAHASHI Akio*

Numerous swiddens and rice terraces are scattered here and there in the mountainous area of northwestern Myanmar (Burma) known as the Chin Hills. This article discusses the natural and social circumstances which sustain village livelihoods and economic strata in a village where swidden and rice terrace farmers live, based on a case study in Hakha Township, Chin State.

Traditional swiddens, where villagers cultivate maize and foxtail millet as the staple food, have become scarce under population pressure. As a result, the fallow period has shortened and per capita arable area has lessened. Meanwhile, the preference for rice has grown so strong that villagers have been developing rice terraces since the 1950s. However, village rice production is still not enough to feed all villagers. Some influential households can supply their own needs but others cannot. While the latter have to earn money if they do not want to resort to eating maize or millet, all have to increase their cash income for housing, clothing, medicine, electricity, education, etc. As a result, households diversify their occupations to include trading, collecting forest products, road construction, work abroad, etc. Actually, no village livelihood can be sustained without non-and/or off-farm earnings, and it is these incomes that determine the socio-economic strata within the village. Even people in deep mountain areas cannot live on agricultural and silvical products alone.

In this study, socio-economic strata or layers are very important. While these economic layers were categorized after the survey on the basis of factors such as consumption, income, and land tenure, I asked villagers to divide all households into four layers according to their own criteria before conducting the in-depth study. Then I collected compressive socio-economic data in the village under survey, interviewing the villagers myself in Myanmar (Burmese). In processing the data, I tested whether the differences between the villager-categorized layers were significant or not by analysis of variance. However, because of the way the categorization was done, we cannot utilize parametric methods, such as one-way layout ANOVA. Hence, I employed a nonparametric method, the Kruskal-Wallis test.

Keywords: Myanmar, Chin State, rice terraces, swiddens, migrant workers, village economy, environmental conservation, economic reproduction

キーワード: ミャンマー，チン州，棚田，焼畑，出稼ぎ，村落経済，環境保全，経済の再生産

* 東京大学東洋文化研究所；The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

はじめに

ミャンマーの原風景といえば、まず想起されるのは、広大で平坦なエーヤーワディ川流域の河谷平野やデルタであろう。そしてさらにミャンマーを知ろうとする者は、この平地を馬蹄形に囲む山の世界に踏み込むことになるであろう。行政区分的には西から時計廻りに、チン州、ザガイン管区北部、カチン州、シャン州、カヤー州、カイン州東部がこれに相当する。またザガイン管区を除いて、それぞれの州名にその名を冠している民族が多数を占める地域でもある〔高橋 2000: 22〕。

山間部の農業は大まかに盆地・支谷底型と斜面型の2つに分けることができる。盆地や支谷底では谷川の井堰や山麓の湧水池から水路が引かれ、高台では灌漑畑作が行われ、低地には水田が展開して水稲が作られている。山地の斜面はチークやピンガドーなどの用材や薪炭材の供給地となるばかりでなく、農業にも利用されている。盆地や支谷底に近く比較的人口密度が高いところでは常畑が開かれ、これに比べて相対的に人口の希薄な遠隔地では焼畑が行われている〔同上書: 22-24〕。また、山の斜面の湧水や天水を貯水できる人工池を利用して、斜面を階段状に開いて棚田が作られている地域〔高橋 2004; 2005; 2006〕、焼畑を茶畑や樹園地に変えて商業的農業をはじめた地域〔高橋 2004〕、山の資源を利用してミャンマー風巻きタバコの原料であるタナベツ〔高橋 2000: 23〕や木炭等を生産する地域なども山間部には散在する。

東南アジア最貧国、グローバリゼーションから取り残された感のあるミャンマーのそのまた山奥、というと牧歌的、自給自足的な社会経済生活が想像される可能性が高いが、平野部の村より立派な家々が立ち並び、自家発電設備があって、商品経済が細部にいたるまで浸透している地域も多い。その理由はおそらく「山奥」が国境に近いせいであろう〔高橋 2006: 22〕。ビルマ式社会主義の「鎖国」的経済体制下（1962～88年）での物不足の時代、周辺諸国との闇貿易ルートのはほとんどは山間部を通り、外国の商品はまずここを通過して平野部に降りていった〔高橋 1999: 304〕。そして国境が公式に開放された現在、タイ、インドや中国から工業製品や現金がより大量に入ってくるばかりではなく、山村の生産物や資源さらには人が国境を越えて流れてゆきやすくなっている。またその進み具合や普及度に問題があるとはいえ、独立以後の医療制度の普及は山間部でも人口を増加させた。すなわち、商品経済の進展と人口圧の上昇という、世界中のどこにでもあり、特に山間部においては森林資源の濫用や枯渇に繋がりがかねない問題を、ミャンマーの「山奥」も抱えているのである。

山の斜面の棚田は、地すべり防止や洪水調節に役立ち、自然環境保全的であることは衆目の一致するところである。また焼畑もローテーションの秩序さえ守られれば持続可能な農法であろう。焼畑が維持できなければ、常畑に転換してもよいであろう。しかし生産性が必ずしも高

いとはいえないうこうした農業だけでは、人口圧や商品経済化に対応し続けることはきわめて困難である。生計が維持できなければ、山村に適した資源利用形態である棚田や山畑（焼畑および常畑）ばかりでなく、村や集落も放棄され、平野部へ都市部へと人口は流れていくことになるであろう。このような流れを悲観する必要は必ずしもないであろうが、本稿では、ある程度人口を流出させながらも、山村で人々の生活が継続し、棚田や山畑も耕作され続けていく再生産システムを考察してみたい。それは決して理想系や理念系といったものではなく、一定のバランスを保ちながら、現実にはミャンマーの山の中で営まれている経済生活である。ミャンマーの山の民は、土地および生態資源をどのように利用しながら、進行する人口圧と商品経済の展開に対応しているのであろうか。それは村内の社会経済的な階層とどのような関係があるのであろうか。ミャンマー北西部チン丘陵の住人たちの事例をもとに、論考を進めていくことにしよう。¹⁾

本稿を執筆するための調査にあたっては、予備調査の段階で15カ村を回り、世帯別調査の対象村としてフニャーローン（Hniar Lawn）村を選定した。調査票を用いて世帯ごとにインタビュー調査を行ったが、その前に、村の人たちにあらかじめ全世帯を階層に分類をしてもらい、その中から無作為に調査世帯を抽出した。村人たちの意識の中に階層概念はあるのか、あるとしたらどのような指標を基に分類しているのか、その指標は戸別世帯調査によって得られたデータと客観的整合性はあるのか、といったことを確かめなかったからである。よって本稿では、調査の後に事後的に所有地や所得によって社会的経済的階層分類を行うのではなく、村のルージー（lugyi）²⁾ たちによって作成された階層分類をもとに、それが調査データと対応しているのかを吟味するという方法で分析を行っていく。

I 調査地の概要

ミャンマー連邦の西部にはアルプス・ヒマラヤ造山帯に属する若い褶曲山脈が連なっている。

- 1) 2004年11月から12月にかけて、まずチン州ファラン県のハカ郡とファラン郡で予備調査を行い、必要な統計も収集した。このとき、15カ村を訪ねて、村の農業や社会経済についてできるかぎりの情報を収集した。そして、ハカから通って調査しなければならないという制約条件を考慮して、調査村をフニャーローン（Hniar Lawn）村に決めた。この村の世帯別調査は翌2005年12月に行った。インタビュー調査の方法は、筆者が平地部のミャンマーで行ってきたのと同様に、ミャンマー語で書いた調査票を用いて、筆者自身がミャンマー語で質問し、これも筆者自身がミャンマー語で回答を記入していくというものである。しかし、筆者の質問は解するものの、ミャンマー語で答えることができない村人も多く、ミャンマー語＝チン語通訳を雇った。ただし、一口にチン語といっても村が違えば通じないといわれるほど異なっているので、ミャンマー語が堪能な村人に通訳をお願いした。
- 2) 通常「長老」と訳されるが、年に関係なく、ヤヤカのメンバー、その経験者、牧師、教師など村内で勢力および名望のある者がルージーと呼ばれる。

最北部には 5,000 メートル級の高峻な山岳地帯があり，ここからパトカイ山脈，ナガ丘陵，チン丘陵，アラカン山脈が順次高度を下げながら，南西に向かって伸びている。チン丘陵は南北 400 キロ，東西 100 キロの広がりを持ち，高度 2,000 から 3,000 メートルの山脈が，深い谷を挟んで，並行または雁行して走る [酒井 1983: 40]。

調査地のフェラン県ハカ郡はこの丘陵の中にある。郡庁の所在地はハカ町，少数民族州のひとつであるチン州の州都でもある。町の位置は北緯 22 度 37 分，東経 93 度 37 分付近，同町内にある水準点の標高は 1,865 メートルである。ハカ町はチン州の中央よりにあるがそれでもインド国境までの距離は直線で 50 キロメートルほどしかない。ハカ郡の面積は 4,165 平方キロメートルで，郡内のほとんどの土地は標高 900 メートルから 2,100 メートルにあり，最も高い山は 2,700 メートルある。

ハカ郡の土地利用状況を示したのが，表 1 である。原野 (cultivable waste) の割合が非常に高く，58 パーセントもある。多くは草地や低木の疎林である。焼畑の休耕地もここに含まれる。この原野と 38 パーセントを占める森林地 (forest land) と合計するならば，郡の 96 パーセントは草地や林地であると考えてよいであろう。農用地 (net sown area) はわずかに 2 パーセントにすぎず，うち 78 パーセントがタウンヤー (taungya) と呼ばれる焼畑移動耕作地，水田 (le) は 18 パーセントですべて棚田である。またウーイン (ûyin) と呼ばれる樹園地が 4 パーセントほどあるが，これはタウンヤーを常畑化あるいは樹園地化したものか，宅地の一部に果樹を植えたものであろう。フニャーローン村の調査で登場する養魚池もこの中に含まれているように思われる。

ハカ郡は上記の緯度でもわかるように，近くを北回帰線が横切っている。また，丘陵の中にあるので，ミャンマーの平地部とは気候がかなり異なっている。ハカ郡の気温と降水量の月ごとの変化を図 1 に示した。年間降水量はおよそ 1,800 ミリであり，丘陵を降りたドライゾーン

表 1 ハカ郡の土地利用 (2002/03 年度)

地 目	エーカー	%
水田	3,631	17.9
常畑	0	0.0
カイン・チュン	0	0.0
樹園地	776	3.8
焼畑	15,896	78.3
農地合計面積	20,303	2.0
林地	388,927	37.8
原野・荒地	595,769	57.9
その他 (道路, 宅地等)	24,274	2.4
郡総面積	1,029,273	100.0

出所：[myanmà sai'pyôuyêi lou'ngân [ミャンマー農業公社] 2003]

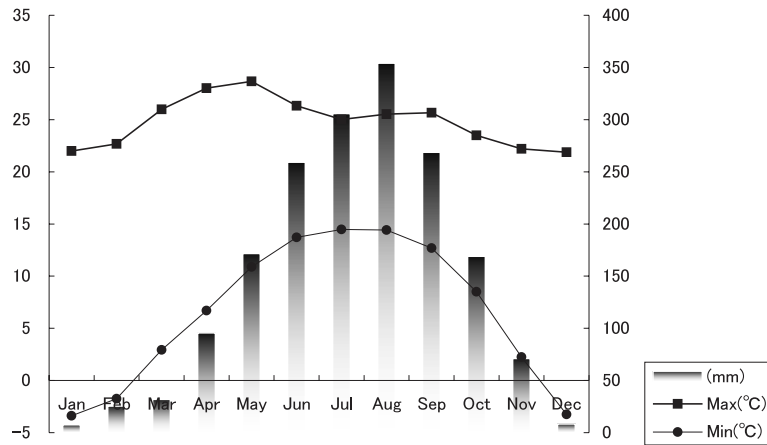


図1 月別平均気温（1991-2000）と降水量（平年）
出所：ハカ郡農業公社

の降水量の2倍以上である。降水は5月から10月にかけての雨期にほぼ集中してあり、11月から4月にかけては、ほとんど雨が降らない乾期となる。棚田での水稲作も焼畑地でのトウモロコシやアワの作付もほぼ雨期の間に登熟させて、乾期に収穫できるように行われている。高地であるので気温は管区ビルマ（Burma Proper）より当然低く、12月から2月にかけての涼期には最低気温が零度以下になる日も現れる。それをすぎると最低気温も最高気温も上昇を始め、3月から5月にかけては最も暑い暑期となる。といっても、平地部よりはずっと涼しい。そして雨期になると日照時間が短くなるので、最高気温がやや下がってくるが、最低気温は上がってくるので、気温の日較差が小さくなる。他の季節についても日較差をみると、最高気温の変化に比べて最低気温の変化の方が明らかに大きいので、涼期に日較差が最大となり、暑期の日較差は雨期と涼期の中間となっている。斜面の農地の気温は高度と日照条件によって左右され、それは当然作物栽培にも影響する。それは平地部にはない、山の農業の特質のひとつである。

ハカ郡の人口は表2に示すように約5万人である。この値と表1の郡総面積から人口密度を計算すると、1平方キロメートル当たり12人ほどになる。このように希薄な人口は郡のほとんどが林地と草地であることをそのまま反映している。ハカ町と農村部の人口を比較してみる

表2 ハカ郡の人口（2004-05年度）
(単位：人)

都市部	農村部	計
19,774	29,661	49,435

出所：ハカ郡農業公社

と、町の人口が約2万人と、40パーセントの人口は町に集中している。このような山の中の郡でも町への人口集中はかなりのものである。いや、山の中であるからこそ、少しでも雇用機会や消費生活に恵まれていそうな町に人々が出てくるのは当然のことともいえようか。ハカ町周辺の村落をざっと調査してみるだけでも、まずは子供たちを町の学校に送り、親たちもお金が貯まれば、町に家を建て、やがては村を捨てて、一家でハカの町に移り住んでしまう事例が少なからず見受けられる。

さて調査村のフニャーローン村である。その位置は、北緯22度42分、東経93度36分、ハカから北へ12キロほど離れたところにある。村の村落平和開発評議会（通称ヤヤカ）の議長（すなわち村長）の宅地の海拔高度は1,676メートルであり、村の家々はだいたい1,600メートルから1,700メートルの高さに散在している。ハカ郡の中では町に最も近い村のひとつであり、村人たちは3時間ほど歩いてハカの町に出かけていく。起伏の多いチン丘陵では、自転車はあまり役に立たず、車やオートバイの普及は皆無に近く、動物による輸送はほぼ貨物に限られていて、人間はどんなところにも歩いていく。さすがに麓の都市、カレーミョウやガンゴー、あるいはインド国境の町タタランへは路線バスがあるが、それ以外の道はすべて徒歩路線である。

村の総世帯数は2005年12月時点で202、人口は1,060であったので、一世帯あたりの平均構成員数は5.25人である。大多数は核家族世帯なので、夫婦と子供3人が基本的世帯構成となる。これを悉皆調査するのは時間的に無理であったので、無作為抽出調査を行った。ただし全世帯から直接無作為抽出するのではなく、村のルージー10人ほどに依頼して全世帯を対象にまず4つの経済階層に分けてもらうことにした。こちらからは階層の数を4にしたいことと各階層に入れる戸数は自由であることだけを告げ、分類の基準や方法などはすべて彼らに任せた。彼らは、経済的に上位である層から順に、A層16世帯、B層32世帯、C層50世帯、D層61世帯に分けた。そしてこの中から各層15世帯ずつ計60世帯をランダムに選んで戸別調査を実施した。ところで、階層別のリストが出来上がったあとにどのような基準で分けたのかを聞いてみたところ、ルージーたちが最も重視したのは米の自給率であるとのことであった。A層は1年中自家飯米が自給できる世帯、B層は6カ月分、C層は3カ月分の自家飯米自給ができ、D層になると1カ月分も自給できない、とのことである。そこでルージーたちが言うように各層間で本当に自給率に有意な差があるのかを検定してみたのが、表3である。³⁾ 各層の平均自

3) A, B, C, Dの各層の分け方に意味があるかどうか、すなわち平均値に有意な差があるかどうかの検定に関して、まずは一元配置型の分散分析を試みたが、当然のことながら、Bartlett検定において、「各層の分散は等しい」という帰無仮説が棄却される場合が多かったので、ノンパラメトリック法のKruskal-Wallis検定を用いた。そのうえで、各層（各郡）の対比較については、Steel-Dwass法を使った。

表3 村人による階層区分の検定

階層区分指標 (単位)	米の自給率 (%)	棚田の所有面積 (エーカー)	大型家畜の価値 (1,000 チャット)	豚 (頭)	屋根材
A	75	2.00	961	0.93	1.00
B	61	1.67	321	1.00	0.73
C	55	1.18	88	0.80	0.60
D	11	0.08	7	0.67	0.07
Kruskal-Wallis 検定 (χ^2 値)	28.33 **	37.34 **	43.43 **	1.53	28.41 **
Steel-Dwass 検定					
1%有意	A-D, B-D, C-D	A-D, B-D, C-D	A-B, A-C, A-D, B-D		A-D, B-D
5%有意		A-C	B-C		A-C, C-D

出所：筆者調査による。表3～10も同様。

注：1) A, B, C, Dの各値は平均値。他の表も同様。

2) χ^2 値の右肩の*は5%有意, **は1%有意。

3) 屋根材に関しては、トタン板を1, チガヤを0として計算した。

給率を計算してみると、Aから始まってB, C, Dの順に落ちていくものの、A, B, C各層の間に有意な差は認められない。ただしD層だけは他の各層との間に有意な差があり、米の自給率が著しく落ちる。これは棚田の所有状況を反映している。A層とB層に属する調査世帯はすべて棚田を所有し、C層に属する世帯も棚田を所有しないのは1世帯だけである。これに対し、D層から抽出した15世帯中、棚田を保有するのはわずか4世帯にすぎない。表3に見るように、米を生産する棚田の所有についてもC層とD層の間にだけ明確な境界線が存在するのである。すなわち上位3階層を米の自給率や棚田の保有面積だけで3分割するには無理があるといえる。そもそもどの層に属する世帯も多かれ少なかれ米にアワやメイズを混ぜて食べており、自給率を正確に計算するのは難しい。すなわち自給率基準は一応の目安にすぎない。

そこで彼らはさらに家のつくりおよび家畜の所有を判断基準に加えて、村の各世帯を階層別に分類したそうである。家については屋根材がトタン板か茅葺きかが分類の目安となる。⁴⁾ トタン屋根への張替えは、キマメ (Pigeon Pea) がよくできた、牛を売った、後述のようにミゾラムやマレーシアで稼いだなど、なんらかの大金の蓄積や入手と繋がっており、一生に一度の大改築である。この屋根材について各階層間に差があるのかについて検討してみたところ、表3に見るように、A層世帯の屋根はすべてトタン張りであり、B層で7割、C層でも6割がトタン屋根であるが、D層ではトタン屋根の世帯は1世帯のみである。つまりここでもD層は茅葺き屋根、A, B, Cはトタン屋根という二分法が確認されるだけである。

4) 茅 (チガヤ) はビルマ語ではテッカーと呼ばれており、対応する学名は *Imperata cylindrica* であるが、これ以外にも色々な草が屋根葺き用に使われているようである。そしてそれら草葺き屋根を総称して、彼らはテッカー葺きと呼んでいる。テッカー葺きなら、壁も草葺きで床は竹か土間、トタン葺きなら壁は板で床も板、という組み合わせになっていることが多く、屋根の違いが家の作りそのものの違いを表徴している。

最後に家畜を見てみよう。彼らが考慮に入れたのは牛，水牛，馬の3種であり，豚は含まない。国連開発計画（UNDP）やGRETのマイクロファイナンス⁵⁾によって，貧困層でも豚を飼えるようになったからである。⁶⁾ 大型家畜3種の所有について，調査時での現在価値の合計値を計算し，各層で有意な差があるか分析してみた。すると，各階層間すべてに有意な差がある，という結果がでた。数値で見ると，ルージーたちが指摘した指標の中で，米の自給率ではなく，大型家畜の所有こそが，階層間の格差を示すバロメーターとなっているのである。村人たちは，葬式に捧げものをする，家を建てる，マレーに行く，子供を高校や大学に行かせる等，一時に大金が必要なときは家畜をつぶすか売るかする。家畜は富の蓄積とその格差を象徴するまさにライヴストック（生ける資産）なのである。

上記のように，村の長老たちは，水田（棚田），家畜，家の作りをメルクマールに村の世帯群を4層に分類した。つまりここには最も重要であると思われる「所得」が入っていない。彼らによると，所得は毎年変動する不安定なものであり，判断基準にはならない。これがストックとして固定されて始めて考慮に入れられるとのことである。また村人の伝統的生計手段であり，原則的にはすべての村人が保有できる焼畑も判断基準に入っていない。⁷⁾ そこからできるアワやメイズはすべて自給作物であり，かつ米より劣る食糧であると考えられているからである。焼畑の保有や所得と階層間格差についてのルージーたちの判断は正しいのかどうか，本稿でさらに吟味していくことにしよう。⁸⁾

5) UNDPの指導と初期資金の提供をもとに，村内の貧困層が複数のSRG（Self Reliance Group）を結成し，週1回の預金活動と小規模貸付を行っている。しかし，毎週の少額預金ができない，会議よりも日雇いに出たい，借入金が返せるか不安だ，といった理由で，SRGに加盟していないあるいはできない極貧層が多数存在する。SRGからの借入金は子豚の購入の他に，学費や医療費の支払や米の購入に使われている。

もうひとつのマイクロファイナンスは，フランスのNGO，GRET（Groupe de Recherche et D'echanges Technologiques）によるものである。これも村内にグループを結成して借入金に対して連帯責任を負うが，預金業務はない。農業や畜産の振興のための貸付と月1回の会議と利子の徴収がグループの主要な活動である。このグループにはどの階層でも加入でき，貸付金の上限はSRGの2倍ほどである。子豚の購入資金は，SRGからよりもこのGRETから得ている世帯の方が圧倒的に多い。他にも大型家畜の購入や棚田造成資金の一部としてもGRETからの借入金を利用されている。

他に，政府機関である農業開発銀行（Myanmar Agricultural Development Bank）から水稻の作付のための貸付金も村に入ってきている。しかしこれを借りるためにはハカの町まで歩いていかなければならず，農民の気持ちは低い。

6) 表3に見るように，豚の飼養頭数に関しては各階層間に有意な差はない。

7) 実際には，耕作することができないという理由で，村からの焼畑の配分を受けない世帯が調査世帯の中で2世帯あった。どちらもD層に属する世帯である。

8) 棚田，常畑，家畜については，村人は明確に「所有」していると回答するが，焼畑に関しては，後述のようにヤヤカがその配分に関与するので，「所有」という観念はあいまいである。したがって，焼畑については「保有」という用語を用いることにする。ミャンマーにおける「所有」と「保有」の相違については，[高橋2000: 57]を参照のこと。

II 困難さを増す焼畑農業

ハカ郡ではどこの村にいても今でも焼畑移動耕作が行われており、主な農作物はメイズ（トウモロコシ）（ビルマ語では *pyâungbû*, チン語では *Fung Vei*）、アワ（同様に *hsa'hsan, Faang*）、キマメ（同様に, *pêzingoun, Phiong*）、ムクナ [学名 *Mucuna utilis*]（同様に *aunglau', Ra*）、ゴマ（同様に, *hnân, Chi*）などである。特にトウモロコシは、現在は米による代替が進んでいるとはいえ、チン人の伝統的主食である。まずは焼畑の休閑期間や土地の配分方法について、村ごとにどのようなバリエーションがあるのかみていくことにしよう。

サッター村では2年耕作して18年休閑する。1930年代までは25年休閑したという。村の草分けに繋がる3家系38世帯だけが最初に耕地を選ぶ権利があり、もともとは男子すべてがその権利を相続できたが、今では長男のみが相続している。その他の家系に属する134世帯はそのあまりを分けて焼畑を行う。

ゾークッ村では3年耕作して10年休閑する。1970年ころに比べると休閑期間が半減した。そのころまでは世帯ごとに焼畑の範囲が決まっていたそこを移動していたが、人口増とともに移動可能地が減少して、村の共有地として各戸の耕作地は籤引きで決めることになった。

チュンジョン村でも3年耕作10年休閑の焼畑をしてきたが、耕作者の増加に伴い、休閑地の面積が次第に減少し、終にはゼロとなって移動ができなくなり、2004年が最後の焼畑となった。これからは常畑ができるところを個人が探してヤヤカに申請することになるという。

ラウッロン村でも30年前ころに焼畑は村の共有地となったが、籤引きは行わない。個人が適地を見つけ出して村のヤヤカに申請し、申請地が重なったときはより貧困な世帯や棚田を保有しない者に優先的に配分される。かつては2,3年耕作して25年ほど休閑というパターンであったが、現在では一度焼くと7年耕作し、休閑は10年ほどであるという。毎年作付けるメイズの生産量は7年目には6分の1に減るといふ。この村もやがてはチュンジョンのように常畑化に向かうであろう。

土地の希少化に伴い、各村の相続制度も変化した。もともとは男子がみな焼畑地を持つことができたが、サッター村や下記のフニャーローン村のようにやがて男子の一子相続制（長子か末子かは村によって異なる）になり、ゾークッ村やラウッロン村ように共有地となった村もある [高橋 2006: 14]。

さて調査村のフニャーローン村であるが、30年位前は休閑期間20年であったというが、今は4年耕作10年休閑である。村人たちが耕作する焼畑地は地味によって、村の呼称でチュアロー (*Cuar Lo*) とサテック (*Sathek*) の2種類に分かれている。Loは焼畑一般を指し、3年から4年連作できる焼畑をでチュアロー、それ以外をサテックと呼ぶ。このようにチュアロー

は一度開くと3年から4年連続して耕作可能である。1年目はメイズとアワおよびキマメを混作し，2年目からはメイズのみか，これに加えてわずかなムクナを播く。サテックはより地味の劣る土地で，開いた年にのみ1年だけアワを作付けることができるが，あとは次にチュアローを焼くまで休憩しなければならない。つまり実質的の休憩期間は13年である。チュアローは村の草分けの家系に属する男子全員が相続してきたが，現在は1区画のみ，原則として長男のみが相続できることが慣習的に認められており，ヤヤカは無条件でこれを追認する。他の子供たちには相続権がない。表4が示すように，各層とも相続によってチュアローを取得している場合が多い。相続されない区画は村が管理し，耕作を申請した者の中からヤヤカが耕作者を選ぶ。C層の6世帯とD層の5世帯が，これによって耕作する権利を得ており，この制度が焼畑保有面積の平等化に一役買っているようである。サテックはヤヤカのメンバー，牧師，セーエインガウン（十戸世帯長）と呼ばれる村内の十数世帯ごとの代表者等計10人ほどが優先的に土地を選んだ後，希望者に籤引きで分け与えられる。ただし，未亡人は籤引きを免除される。後述のように，貧しくてかわいそうだから，というのがその理由である。表5中で優先的にサテックを得ている世帯群のうち，A，B層は有力者が，C，D層は未亡人がこれを取得している。棚田やチュアロー，後述の常畑など他の土地を持っている者たちの中には，地味の悪いサテック

表4 焼畑の階層別取得手段 (単位：世帯)

	チュアロー				サテック		
	相続	村からの配分	購入	計	優先	籤引き	計
A	8	1	1	10	6	2	8
B	10	1	1	12	3	4	7
C	7	6		13	3	1	4
D	6	5		11	4	3	7

表5 階層別農地保有面積

地目 (単位)	棚田 (エーカー)	チュアロー (エーカー)	サテック (エーカー)	常畑 (エーカー)	ジャガイモ (ヴィス)
A	2.00	0.78	0.78	1.74	93.33
B	1.67	0.92	0.35	0.54	86.67
C	1.18	1.40	0.17	0.26	58.00
D	0.08	0.68	0.32	0.12	32.00
Kruskal-Wallis 検定 (χ^2 値)	37.34 **	5.15	5.88	24.96 **	6.48
Steel-Dwass 検定					
1%有意	A-D, B-D, C-D			A-C, A-D	
5%有意	A-C			B-D	

注：1) 常畑には宅地も含む。

2) ジャガイモの栽培については，回答者が面積を答えられないので，種芋の重量を代用した。1ヴィス (viss) は約1.63キログラム。

3) 1エーカーは約0.4ヘクタール。

4) χ^2 値の右肩の*は5%有意，**は1%有意。

クを敢えて希望しない者も多い。チュアローとサテックの階層別平均保有面積を表5で見ると、棚田のように富裕層ほど大きいという傾向は見られず、検定の結果でも階層間の差は認められない。

棚田の開発が始まる前は、村人の主食はメイズで、その補助としてアワが、どちらも焼畑のみで作られてきた。つまり焼畑は家族の腹を満たすための自給作物の生産地である。村人たちに均等に近い形で焼畑が配分されるのはそのためであろう。3年に1度作られるキマメが現金収入をもたらしているものの、「焼畑は自給地」の原則は今も変わっていない。しかし人口圧の上昇とともに休閒期間が短くなって肥沃度が劣化し、ひとり当たり面積も減少してきているので、焼畑の生産物だけで自給レベルを満たすのは至難の業である。ましてや商品経済の展開の中で、焼畑だけで生計を立てていくことはできないのが村の現状である。

そのような状況で小面積ながら貴重な現金収入となるのが、チュアローやサテックよりも標高が高く気温が低いところにある焼畑で作られるジャガイモである。4、5年耕作して、10年から15年休閒する、地味も気象条件も悪い焼畑で作られるが、労働集約的で土地生産性は高い。A層からD層まで、どの階層もこれを耕作する世帯を多数含んでおり、ジャガイモ作からの世帯平均収入は階層順になっているものの、階層間に有意な差はない。特に貧困層にとって、ジャガイモの栽培が重要な収入減となっていることが想像できる。

さらに焼畑の変化で目立つのは、1990年代から急激に増加しているアミューダン・タウンヤーである。アミューダンとは「常時」という意味であるので、これは常畑を指す。ただし作付けされているのは、キャベツやカラシナといった野菜の他、ミカン、バナナ、アンズ、パッションフルーツ、パパイヤなどであるので、樹園地といったほうがよいかもかもしれない。宅地と一繋がりになっていることも多くて紛らわしいが、宅地面積を質問して0.1エーカー（400平方メートル）以上との答えが返ってくれば、常畑を含んでいるものと考えてよい。これを基準に常畑の所有世帯数を数えてみると、A層の13世帯が、B層の5世帯、C、D層の各2世帯を大きく引き離している。A層の世帯群は富裕であるだけでなく、政治的勢力も持つ有力者層でもある。常畑を土地記録局の台帳に登録するにはそれなりの金銭と政治力が必要となる。A層の世帯群はチュアローの一部を経済的および政治的影響力を生かして恒久化したものと思われる。面積的にはA-B間に有意な差は出なかった（表5）が、権力と結びついた焼畑の常畑化とその所有化をA層の経済的行動の特徴のひとつとして挙げてよいであろう。

III 自家飯米確保のための棚田開発

ハカ郡の棚田群の開発は1950年代に教会の牧師の主導によって始まり、60年代になると政府の指導によって本格化した。村人たちもメイズよりも米を食べたかったので、これに積極的

表6 棚田の階層別取得・拡張手段 (単位：世帯)

	相続	相続 + 購入	購入	購入 + 造成	相続 + 造成	造成	購入 + 造成 + 購入	計
A	1	2	1	3	1	7		15
B	2	1	2	4	2	4		15
C	4		2	1	1	5	1	14
D						4		4

に対応して家族労働，村の呼称でフローブン（Hlawbung）と呼ばれる交換労働そして賃労働，と可能なかぎりの労働力を組み合わせて，人力によって棚田を造成してきたし，今でも造っている。フニャーローン村でも牧師が1950年代に棚田の技術を持ってきて，村の有力者たちが造りはじめた。棚田造成は1980年代に本格化し，記録に残っているかぎりでは80年代半ばで50エーカーだった棚田面積が，1994年に120エーカーになり，2004年には205エーカーになった。この20年間で4倍になったわけである〔高橋 2006: 10〕。表6に見るように，単なる開墾だけでなく，相続や購入で得た棚田を拡張するなどして，自ら棚田を造成している世帯がA層とB層では3分の2以上を，C層では半分以上を占める。しかし棚田を造るには機会費用も含めてエーカーあたり30万チャット（課長クラスの公務員の給与の約2年分）のコストがかかるといわれており，誰でもが十分な面積を造成できるわけではない。D層の4世帯が棚田を造成しているが，0.3エーカー前後の猫の額ほどの棚田でしかない。

各棚田は個人所有で，ヤヤカがその配分や耕作場所を決めるタウンヤーとは異なる所有形態となっている。ただし，棚田を作る場所についてはヤヤカの許可が必要とのことである。棚田を作る場合，上からか下からかといった順序に関する慣習あるいは技術的な制約はなく，スロープを見ながら上からも下からも作っていく。棚田を相続できるのは男子のみで，複数の場合もあるが，たいていは一人が継ぐ。男がいなければ女も相続可能であるという。F1ハイブリッド米を作り，化学肥料を多投していたナムカンの棚田〔高橋 2004: 18-20〕と異なり，ハカ郡では棚田に肥料は一切投入しない。エーカーあたり収量は，ナムカンの棚田の粳96ティン（1ティンは20.8キログラム）に対し，32ティンと3分の1である。

苗代は4月下旬に棚田の近くに水を張らずに作る。雨期に入って雨が降り棚田が潭水したときにちょうど田植えができるように逆算して，苗代を作るのである。1世帯で3種類から5種類の粳を播種する。通常40日から50日後に移植するが，雨が降らなければひたすら待つ。ただし，海拔1,500メートル以上の標高の高いところにある棚田は6月中に田植えしないと出穂期に冷害を被りやすい。低いところは遅れてもよいそうである。標高が高くて水温の低い棚田では，村の呼び名でチュアントイ（Cuan Toi），ブートイ（Buh Toi），ゾーフムイ（Zo Hmui）な

どの耐寒性の高い品種が植えられる。これらの品種の形状は丸みを帯びており、食味は堅くてあまり美味くないといわれている。標高が低くて水が暖かい棚田ではジャパニー (Japanni)、ヴァンライ (Vanrai) といった、形状が細長く、食感が柔らかい品質のよい米が作付される。

本田の耕起・整地作業は雨期が本格化する6月中旬ころに行われる。シャン州では水牛は1頭立てであるが、ここでは牛だけでなく水牛も2頭立てで、犁や耙を引く。牛にもフローブンがあり、牛や水牛を借りて労働で返すフローブンも可能である。そしてすぐに田植えである。平野部では苗取は男、田植えは女と決まっているが、ここではどちらとも女が行うことが多い。またどちらにも男が入ることができる。賃労働だけでなくフローブンによっても労働力が調達される。

除草は田植え1カ月後に女子労働力によって行われ、世帯外から労働力を調達する場合は、賃労働のほかにフローブンも使われる。

稲刈りは10月20日から11月30日にかけて行われる。男女とも参加可能である。どの棚田もほとんど同時期に稲刈りをするので、フローブンはできない。刈り取った稲束は女が集めて脱穀場まで運搬し、そこで男が足で踏んで脱穀する。これにもフローブンはない。棚田は村の居住地よりもはるか下方にあるため、脱穀した粃を村まで運ぶのも一苦勞である。人力による場合、人が担ぐことができるのは1ティン(約20.8キログラム)から1.5ティン程度で、近ければ1日3,4往復、遠い棚田では1往復がやっとのことである。馬を持っているか、これを借りることができればもっと楽に粃を運ぶことができる。通常運搬料を取らないのが村の慣習である。

粃を収穫したあとの精米であるが、村には4世帯の精米機所有者がおり、すべてA層に属する。精米機の所有も富の象徴のひとつといえよう。

村人たちの話によると、1985年ころには村の半分の世帯が、メイズと併用して米を食べるようになったという。2004/05年度、チン州全体で見た場合、すべての人口が米のみを食べると仮定したときに必要な量の54パーセントが州内で生産され、ハカ郡のみをみると46パーセントである。同郡のメイズの充足率は64パーセントであるので、両主食を合計するならば10パーセントほどの余剰が出ることになるが、それでも米への需要圧力は非常に強いものがある。単に食味がいいとか、調理しやすいとかだけでなく、米をどれだけ食べることができるかが、村内での社会経済的ステータスを決める重要な要件となっている。

以上、山の土地資源を利用した村の農業について述べてきたが、ここで農業生産活動から生まれる所得構造を概観しておこう。村の土地資源を棚田、チュアロー、サテック、ジャガイモ畑、宅地を含む常畑の五つに分類し、階層別にその所得構造を示したのが、表7である。A層とB層では棚田からの所得が最も高く、チュアローがそれに続き、現金収入に結びつくジャガイモ畑と常畑からの所得は前2地目からのものより若干少ない。そして想像通り最も所得が低

表7 階層別農業所得構造

(所得金額の単位：千チャット)

地目	棚田	チュアロー	サテック	ジャガイモ畑	常畑	農業所得
A	212	97	36	94	84	523
B	120	101	25	74	85	404
C	80	128	9	48	6	269
D	10	94	12	27	2	146
Kruskal-Wallis 検定 (χ^2 値)	38.02 **	2.02	3.65	8.32	22.04 **	25.14 **
Steel-Dwass 検定						
1%有意	A-C, A-D, B-D, C-D				A-C, A-D	A-D, B-D
5%有意					B-D	A-C, C-D

注：1) 常畑には宅地も含む。

2) χ^2 値の右肩の * は5%有意， ** は1%有意。

いのがサテックである。C層とD層ではチュアローからの所得が最も多く、それに次ぐのがC層では棚田、D層ではジャガイモ畑である。サテックからの所得が少ないのはA、B層と同じであるが、C、D層では常畑からの所得も極端に少なくなっている。地目別の所得に注目してみると、チュアロー、サテック、ジャガイモ畑の3種の焼畑からの所得については階層間の格差が明確でない。これは焼畑の土地保有が比較的均等であるからである。土地所有の格差(表5参照)がそのまま所得の格差に反映するという関係は棚田と常畑についても同様で、棚田所得はC層とD層の間には差があるが、A、B、C各層の差に関してはA-C間でのみ、常畑所得の場合はA-C間とB-D間でのみ有意であり、隣り合う2層間の差は有意ではない。結局この2地目からの所得の階層間格差が農業所得に反映している。すなわち、有意な格差が見出されるのはA-C間とA、B、C-D間だけであり、A層とB層、B層とC層の格差は有意ではない。

IV チンの村の山村経済

これまで述べてきたのは、いわば「農業経済」の問題である。村の経済活動の基本である焼畑と棚田の耕作は基本的には自給的であり、日用品の購入や家屋の修繕から教育や医療に至るまで、商品経済の中で生活していくためには、現金が必要となる。しかしジャガイモ畑と常畑からのみで十分な現金収入を得られる世帯は少ない。つまり、世帯経済および村落経済の再生産構造を分析するには農業だけでは不十分であり、「農村経済」に向き合わざるをえない。

まずその基礎となる世帯の家族構成であるが、表8によると、どの層においても核家族が過半数を占める。これはミャンマー族やシャン族の世帯とも共通する点である [高橋 2000: 97-98]。同表の右方向に目を移してみると、A層には4世帯、B層には3世帯の拡大家族世帯があり、拡大小家族世帯になるとC層にまで広がって、5世帯存在する。裕福な世帯は家族構成員が多くその構成も複雑化している、といえそうであるが、表8が示すように、この3階層の世

表8 世帯階層別家族形態 (単位：世帯)

	核家族(a)	母子家族(b)	父子家族(c)	拡大小家族(d)	拡大家族(e)
A	8	1		2	4
B	10	1		1	3
C	8	1	1	5	
D	8	7			
計	34	10	1	8	7

出所：筆者調査による。

注：(a) 夫婦＋子ども，または夫婦のみの家族

(b) 父が欠けた核家族

(c) 母が欠けた核家族

(d) 核家族＋独身の親・孫・キョウダイ

(e) 2世代の夫婦を含む家族

表9 世帯構成員と出稼ぎ (単位：人)

	世帯構成員数	労働力 (男子)	労働力 (女子)	労働力 (計)	マレーシア への出稼ぎ	ミゾラム への出稼ぎ
A	6.7	2.00	1.60	3.60	1.20	0.53
B	6.5	1.53	1.33	2.87	0.47	0.40
C	5.0	1.27	1.27	2.53	0.33	0.60
D	3.6	0.53	1.27	1.80	0.07	0.27
Kruskal-Wallis 検定 (χ^2 値)	19.97 **	14.14 **	1.70	13.85 **	16.50 **	2.09
Steel-Dwass 検定						
1%有意	A-D, B-D	A-D		A-D	A-D	
5%有意						

注：1) A, B, C, D の各値は平均値

2) χ^2 値の右肩の * は5%有意, ** は1%有意。

帯構成員数については有意な差がない。労働力についても男子労働力に差があるものの有意ではなく、女子についてはほぼ同数である。これらと対照的なのが、D層世帯の家族形態である。母子家族 (fatherless family) 世帯の割合が他の層と比べて非常に多く、世帯構成員も、当然のことながら男子労働力も極端に少ない。貧困の要因のひとつに、母子家族化があるということができよう。

世帯構成員に関する調査をさらに続けていくと、マレーシアに多数の成年男子が出稼ぎ⁹⁾に出ていることに驚かされる (表9)。調査世帯各層 15 の中で、A層の 10 世帯、B層の 5 世帯、C層の 2 世帯、D層の 1 世帯が、調査時点で、マレーシアへ出稼ぎに行っている男子世帯主か息子がいる、と答えた。さらに過去にマレーシアに出稼ぎに行ったことのある男子構成員がい

9) 海外への出稼ぎの場合、調査世帯で寝食をともにしていなくても、世帯主およびその 1 親等に当たる独身の親族が出稼ぎに出ている場合と、1 親等に当たる既婚の親族および姻族が出稼ぎに出ている調査世帯からの渡航費出費か当該世帯への送金がある場合、「当該調査世帯から出稼ぎ者が出ている」と定義し、それにかかわる支出および収入は世帯のものとして計上する。

る世帯が，A層に2世帯，B層に1世帯，C層に3世帯含まれていた。村でただ一人オートバイを所有する現村長は，1998年に村から初めてマレーシアに渡った若者の一人であり，A層の中でも裕福な部類に入る。彼によると，電気工事や建築作業に従事することが多いという。この出稼ぎには政府のアレンジによるものと入管を通らずにタイ経由で陸路マレーシアに入るものとの二種類がある。前者は安全に就業できるが両国政府へ納入する税がかかり，純収入は後者よりも少ない。後者は見入りはいいものの，マレーシアで不法滞在者として捕らえられることもしばしばあるという。またミャンマーを出国してマレーシアに入国するまでの諸費用が，前者で100万チャット，後者では50万から60万チャット掛かるという。前述の公務員給与の3年から6年分にも当たる。村人は強制送還されるリスクは高いがコストが少なくかつ税金も取られない後者を好み，出稼ぎ者の8割方はこちらを選択している。1年で倍にして返すという約束で，出稼ぎ者は親戚中を駆け回って出国費用を集めるか，すでにマレーシアで稼いでいる親族に送金してもらうかして，ヤンゴン，ミャンマーとタイの国境，そしてマレーシアにそれぞれいる仲介者を經由して，17日間もかかって，彼らの言によると，「豚のように」運ばれていく。こうしてうまく稼げた者は大金を手にするが，捕まってしまった者には莫大な借金だけが残る。C層のマレーシア経験者3人は，捕まりそうになったので早々に引き上げてしまって，借金だけが残った者たちである。それでも危険を冒して若者たちはマレーシアを目指す。いまやマレーシア行きはA層に留まる，あるいは入るための必須条件であるような感さえある。反対にD層の世帯のほとんどは，母子家族世帯でなかったとしても，マレーシアに渡るだけの借金をするコネクションも信用もなく，這い上がる糸口にさえ辿り着けないのである。

インドのミゾラム州へ出稼ぎに行く成年男子も多数いる。調査世帯の中では，A層の5世帯，B層の6世帯，C層の7世帯，D層の3世帯が，ミゾラムへ出稼ぎに行っている世帯主か息子を抱えていた。マレーシアへの出稼ぎは1998年ころに始まったが，こちらは60年代後半からあるという。彼らは焼畑の植え付けが終わる5月ころになると5日間歩いて国境を越える。ミゾラムでの仕事は農作業の手伝いや道路工事が多いという。マレーシアの1割ほどでしかないが相応の現金収入があり，何よりも渡航費用がかからない。ただしリスクはあり，手配師に給料を持ち逃げされ，結局ただ働きさせられたという者が多数いる。

マレーシアで世帯主や息子たちが稼いだ金は送金という形で世帯経済の中に入ってくるが，ミゾラムへは数カ月間行って働いて，自分で給料を持って帰ってくるので，労賃収入に入れることにする。出稼ぎの重要性については，世帯経済の分析で検討することにしよう。

精米業については先述したが，その他にも，労働力の販売を伴わない兼業すなわち自営兼業（自営業）を行う者が村には多数存在する。A層には，棚田と連続した土地に池を所有し，養魚を営む世帯が3世帯ある。棚田保有面積の大きいA層ならではの副業である。これだけでC層の平均世帯所得と同等の所得をあげる世帯もある。近年流行の自営兼業がランの塊根（bulb）

の収集である。採集期間は10月から1月にかけての乾期の間であり、塊根はすべて現地ブローカーを通して中国に輸出される。すでに村の周辺のランは採り尽くされており、2日も3日も山の中を歩かねばならないという。非常に資源収奪的であるが、20歳前後の若者が短期間にまとまった金銭を得るには格好の仕事である。高校生や大学生が自らの学費稼ぎのために休暇を利用してこれを行うという事例も散見された。調査世帯ではA層から1人、B層から1人、C層から13人、D層から3人がランを採集しており、C層に特有の自営兼業であるといってもよいであろう。

労働力の販売を伴う兼業すなわち労働兼業は農業雇用と非農業部門での雇用とに分けて考えることにしよう。農業部門での労働投下は自家労働とフローブンによるのが通常であるが、労働交換ができるほど世帯内に労働力がない場合や一時に大量の労働を投下する必要がある場合には賃労働が採用される。田起こしや畑の整地から、植え付け、除草、収穫まで、田でも畑でもあらゆる作業で農業賃労働者が雇われる。どんな仕事でも男子の日当は食事なしで1,000チャット、女子は食事込みで500チャット（食事代も含めれば600チャット）と相場が決まっている。ただし収穫時は現物で支払われることもある。農業雇用労働をする世帯構成員がいる世帯数は、A層では3世帯、B層では5世帯、C層では10世帯、D層では14世帯と、階層が下がるごとに多くなっていく傾向がある。

非農業部門での雇用では道路工事および薪炭材の伐採と運搬にかかわるものが多い。前者に従事する者はA層に1人、B層に3人、C層に5人の計9人、後者に従事するのはC層に3人、D層に5人の計8人である。非農業部門での賃労働就業者は農業雇用労働従事者と同様に下位2層で多い、ということができよう。

以上のどの範疇にも属さない所得は、「その他」所得とした。これには送金所得、利子所得（利子収入－利子支払）、家賃所得（家賃収入－家屋諸経費）の3種の所得が含まれる。C、D層でこの値がマイナスになっているのは、それぞれの層に属する調査対象各15世帯を平均すると、SRGやGRETへの利子支払が、送金、利子、家賃からの収入を上回っているからである。

これらの分類を踏まえて、世帯所得の構造を表10にまとめてみた。隣接する階層間で有意な差があるのは、農業所得におけるC-D間、畜産所得におけるB-C間である。そしてすべての所得源を合計した世帯所得では隣接する階層間に有意な差が見られない。すなわち、階層区分に所得は考慮しない、というルージーたちの言に統計学的な裏付けが得られた、ということになる。¹⁰⁾

さて最後に、表10を階層ごとに横に見ながら、これまでの議論も踏まえて、階層別に世帯経

10) ただし、借入金利子支払額を控除しない世帯所得を計算してみると、B-CおよびC-D層の間で有意な差が表れる。とすると、ルージーたちは借金の大きさも考慮した、ということになる。

表10 階層別世帯所得構造 (所得金額の単位：千チャット)

	農業	畜産	自営業	農業 労賃	非農業 労賃	その他	世帯所得 (計)
A	523	340	91	7	15	306	1,282
B	404	247	24	11	54	33	773
C	269	81	95	19	65	- 115	414
D	146	39	5	42	10	- 20	223
Kruskal-Wallis 検定 (χ^2 値)	25.14 **	37.89 **	8.41 *	16.44 **	3.91	5.61	20.46 **
Steel-Dwass 検定							
1%有意	A-D, B-D	A-C, A-D, B-D		A-D			A-D, B-D
5%有意	A-C, C-D	B-C		B-D			

注：1) 「その他所得」は送金所得，利子所得（利子収入－利子支払），家賃所得（家賃収入－家屋諸経費），の合計値。

2) χ^2 値の右肩の*は5%有意，**は1%有意。

済の特徴をまとめてみることにしよう。A層では農業所得や畜産所得だけではなく、「その他」所得の額も多い。この項目は送金，利子，家賃の各所得の合計値であるが，これらは密接に関係している。すなわち，マレーシアからの送金をそのまま貸与して年利で100パーセント近くの利子収入を得たり，送金でハカの町に家や倉庫を建ててこれを賃貸して家賃収入を得たりすることができるのである。またマレーシアで稼いだ金で買った，富裕の指標となる牛や馬の所有頭数も圧倒的に多い。村では牛，水牛，馬はフルッチャウンサニッ（hlu'châun sahani'）とミャンマー語では呼ばれる，自由放牧（放し飼い）によって飼育されており，村の周囲の林地や草地に入り込んで勝手気ままに餌を貪る。さらには焼畑の常畑化すなわち囲い込みを積極的に行っているのもこの層である。A層はマレーシアで稼いだ大金を元に，村内で安定的な収入を得ながら，村の政治にも強い影響力を持っている層であるということが出来る。そしてその象徴が現村長である。

B層は保有大型家畜の現在価値でこそA層と有意な格差があるが，それ以外では差が認められない。いわばA層の縮小版のような世帯群である。表10で見ると，有意な差ではないが，「その他」所得のA層との差がかなり大きい。大型家畜もマレーシアへの出稼ぎによって購入されたものが多いので，A層とB層の差はマレーシアでの稼ぎが大型家畜や町の家屋として結実したかどうかの差である，ということができよう。

C層にはマレーシアから帰ってきた男子がいる世帯が3，ミゾラムにいったことのある男子がいる世帯が5あるが，いずれも失敗組である。先述のように，マレーシアに行った3人は逮捕を恐れて稼ぐ前に帰国してしまったし，ミゾラムに行った5人のうち，3人はミゾラムで5カ月から7カ月間道路工夫として働いたが給料が支払われなかった。残りの2人は村で代金後払いで買った水牛を売りに行ったが，国境で逮捕されたうえ，水牛も没収されてしまい，水牛代金と保釈金と裁判費用を借金しなければならなくなった。この合計値はマレーシアへの渡航費に匹敵する額である。この世帯の存在が，C層の平均世帯所得の「その他」所得を大きな負債

にしている。調査時点で、マレーシアへは2世帯、ミゾラムへは7世帯が出稼ぎ労働者を送り出していたが、これも成功かどうかは蓋を開けてみないとわからない、といった状況である。C層の平均世帯所得をみるとB層の5割強である。世帯所得の内容で有意な差が出ているのは畜産所得だけであるが、「その他」所得にも大きな隔りがある。ここにもマレーシア出稼ぎ収支の多大なインパクトを推し量ることができる。

D層に属する世帯は、家族構成から屋根材、米の需給率、棚田の所有面積、農業所得、そして世帯所得にいたるまで、上位各層と大きな隔りのある貧困世帯である。世帯主が寡婦や病弱者などで出稼ぎ収入はないが、棚田を所有する世帯が4戸あるが、どの世帯も猫の額ほどの面積しか持っていない。また家畜もほとんど所有していない。彼らの食料の大部分は焼畑から得られるメイズやアワで、それにわずかな米が加わる。それでも自給はできないので、教会に寄進される米やメイズの再分配に預かってどうにか食べてゆくことができる。¹¹⁾ 生存レベルぎりぎりの世帯群であり、これが村の総世帯の3分の1近くを占める。

世帯所得に占める農業所得の割合はA層から順に増加していく傾向がある。すなわちA層では40パーセント、B層では半分、C層とD層で65パーセントである。村で生活していくためには、そして村で経済的に上昇するには、農外収入を増やしていかなければならないことをこの事実は示している。しかしこれが土地への圧力を緩和するかというと、一概にそうとも言えない。A層で特に目立つ、棚田や養魚池の開発、チュアローの常畑化、大型家畜の飼養といった、伝統的な焼畑農業から逸脱した経済活動は、かえって土地により大きな負担をかけることになりかねない。ランの塊根の収集やメイズを調理するための薪炭材の多用といったような、貧者が環境に負担をかけるいわゆる「貧困の悪循環」だけでなく、富者が環境に負担をかけるといった現象もこの村では起こっているのである。そしてこの矛盾の背後には、チン州のような最貧国の山奥にあっても、伝統的農業のみでは人口圧と商品経済の展開に対応していくことはできない、というきわめてグローバルな問題が横たわっている。

V 社会経済階層と土地・森林資源利用

以上、世帯経済の再生産構造とそこから見た村の経済構造について議論してきた。しかし山村経済の再生産に欠くことのできない資源利用と村落経済の再生産に関して、土地資源の利用

11) 調査対象世帯中、A層のすべての世帯、B層の11世帯、C層の9世帯、そして量的には極端に少ないながらもD層の6世帯が、米、メイズ、アワを現金とともに教会に寄進しており、逆にD層の中の特に貧困な6世帯が教会から食糧の現物供与を受けている。教会は寄進された現金を貧困者に無利子で貸すこととしており、村内の所得の部分的再分配機能を担っているということができる。そのほかに、A層の8世帯が前記6世帯と重複するD層の5世帯に直接食糧を援助している。

については農業との関係で詳しく検討したが、生態資源利用については必要に応じて述べてきただけであった。補論的ではあるが、最後に、森林資源利用と社会経済階層との関係、そしてそれが村落経済にとってどのような意味があるのかについて考察してみることにしよう。

フニャーローン村を含むチン州の多くの村では、今でもすべての村民がほとんど例外なく焼畑移動耕作を行っている。人口希薄で焼畑可耕地が無限にあった時代は先占の原則に則って誰でも好きなだけ山を焼くことができた。人口増加にともない可耕地が減少すると長子相続ないしは一子相続制に変わり、焼畑への人口圧を抑える試みがなされたが、それでも対応できず次第に休憩期間が短くなっていった。それも限界に来ると、ようやく村で焼畑地を共同管理するという方法が採用され、籤引きによる焼畑地の配分がなされるようになった。ただし一部の有力家系が籤引きをまぬかれ、代々受け継がれた焼畑を耕作する権利は多くの村で留保されている。一方、フニャーローン村の事例に見るように、果樹園や野菜畑といったかたちでの焼畑の常畑化およびそこの商品生産が、有力者間で広がっている。しかし農地が希少化しつつあり、かつ配分された農地だけでは多数の村民が十分な現金収入が得られない状況下において、若者たちはインドやマレーシアに出稼ぎに行く。村に帰ってくる者もいれば、外国に住み着いてしまう者、出稼ぎでためた金でハカの町に世帯ごと移る者等出稼ぎの結果はいろいろである。出稼ぎが結果的には焼畑への人口圧を抑える効果を持っていることは疑う余地がない。しかしその一部が村に還流して農地を囲い込んだり、大型家畜を増やしたりして、農地、草地および林地に負担をかける場合も見受けられる。

有力者による棚田の開発や焼畑耕作への村の介入によって、農地への人口圧を緩和する工夫がなされてきたが、焼畑や棚田の対象とならない林地や草地はどうだろうか。例えば調理の燃料として欠くことのできない薪。村では薪の量を測るのにタン (tan) という単位を使っている。長さ 2 フィート 10 インチの薪を高さ 6 フィート幅 12 フィートに積み上げた量 ($0.86 \times 1.83 \times 3.66$ メートル) が 1 タンである。村では 1 世帯あたり 1 から 1.5 タンの消費を念頭に薪炭材が森から取れるように工夫している。まずヤヤカが村の総戸数に合わせて森の中に区画を決めて、各区画に番号をつける。2005 年には 202 世帯あったから、202 区画の薪炭材取得可能区画ができて、ここに 1 から 202 までの番号がつけられる。そして、サテックの場合と同様に、ヤヤカの執行委員 3 人、セーエインガウン 6 人、牧師 3 人、公務員 (教師、保健婦 5 人) がまず優先的に区画を選択し、その後各世帯が番号付きの籤を引く。こうしてほぼ平等に薪炭材の取得区画が配分されるが、実際には 1 年分の薪が十分に取れる区画は少ないそうである。さらに困ったことにこの配分は 3 年に 1 回しか行われないので、あとの 2 年は他所で薪を探すことになる。薪炭材採集による森林資源の劣化に関しては、村は十分な権能を有していないといえよう。これは牛や馬の自由放牧に関しても同様である。一応村の放牧地は決めてあるが、家畜

はその外に出て草を食むこともしばしばある。上述のように、家畜保有頭数が圧倒的に多いのが村の有力者層である A 層なので、放牧地を薪炭林のように分けるような声が出て来にくいのであろう、より多くの家畜を持つものがより資源に負担をかけているという結果になっている。

実は薪の利用についても階層間での相違がある。チン人たちの伝統的な主食であるメイズの調理法であるが、種子を挽くこともなくそのまま茹でて塩で味付けして食べる。乾燥して堅くなった種子をそのまま茹でるわけであるから、非常に時間がかかる。つまりその分だけより多くの薪炭材を燃焼させなければならず、メイズの調理には 1 食あたり米の倍の薪が必要であるといわれている。実際、有意な差はないが、下位の階層ほどひとりあたり薪消費量が多い傾向がある。メイズから米への主食の転換は、食味だけでなく、資源節約の面からも望ましいことであり、それは村人も十分承知している。ただ、C, D 層はこれにキャッチアップできないのが現状である。調理用の薪使用に関しては、上層ほど資源節約的であるといえるだろう。

さらに森の資源を使用する活動としては照明のための松脂の採集が挙げられる。現在村の周辺では松はもう枯渇しており、村人は平均 8 マイルすなわち 13 キロ近く歩いて、松を探し回る。それに費やす労力と時間は 1 カ月あたり 2, 3 人日になるという。村のすべての世帯が、世帯あたり 1 カ月に 1 本の松を切り倒すといわれており、今後も松脂を使用するかぎり、その収集のためにはさらに長い旅を強いられることになる。こういった事情を背景に、2000 年ごろ教会の照明のために小水力発電が導入され、A 層の数世帯が有料でこの電力を自家に引いている。すなわちここでも階層間の相違が見られる。しかし近年、村の有力者たちによって村の電化への努力が行われており、徐々に下位層へと電化の恩恵が波及していくことが期待される。

む す び

ミャンマー連邦北西部の秘境、チン丘陵の中にある村を事例として、山村の社会経済構造および土地と森を中心とした資源利用の現状について論じてきた。

チン人たちの村々は、深い森と原野の中に散在する。彼らの経済基盤は、狩猟・採集と並行して、あるいはそれらが衰退したあとも、これも森の中に散らばる焼畑にあった。戦争と独立を経た 1950 年台になると、灌漑用水を得ることができる場所に棚田が造成されはじめた。馬や牛といった大型家畜も、棚田でしか使われていないことから推して、このころから村で飼われはじめたものと思われる。また 1980 年代半ばから、従来の草葺屋根に替わってトタン葺きの屋根が現われはじめた。フニャーローン村のルージーたちが村の世帯を階層に分けるとき考慮するのは、これら、すなわち棚田からできる米の自給率、大型家畜の所有状況、屋根材の 3 指標である。調査データを分析することによって確認してみると、米の自給と屋根材は A, B, C の上

位3層と最下層のD層を2分するには有効であるが，上位3層間には有意な差が見られなかった。これに対し，大型家畜の所有は村の階層を4層に分類する際に有効な指標であることが確認された。ルージーたちが設定したメルクマールはすべて資産（ストック）であり，経済学において階層といった場合最も重要なシンボルとなる所得（フロー）が入っていない。これが判断材料にならないのは，変動が激しい不安定なものであるから，とのことである。

注目すべきもうひとつの点は，棚田や大型家畜が入るずっと前から村の経済を支えてきた焼畑が指標の中に入っていないことである。誰でもが必要なだけの焼畑を上限なしに開ける時代はとうに過ぎ去り，人口増による焼畑可耕地の相対的減少によって，焼畑地の分配が不平等化しても不思議ではないはずであるのに，階層化のマーカーにはなっていないのである。その理由として第一に，焼畑は籤引き等によって比較的平等に配分され，さらに貧困な寡婦には特別な配慮がなされていること，第二には，いまや主食となった米を焼畑では作ることができないこと，を挙げることができよう。しかし焼畑が全く階層化と関係ないかといえばそうではない。1990年代になって，本来耕作と休閒を繰り返すべき焼畑の常畑化が進展しており，それが村の社会経済的上位層によって行われている，という問題である。ミカンやナシなどの永年作物が作られている常畑は焼畑の何倍も実入りが多く，所得格差を拡大させる要因となりうるからである。常畑の所有が階層化の指標となる日も近いように思われる。

棚田は自家飯米の確保を目的として1950年代から牧師や有力者を先導に開発されてきた。調査時点では棚田の保有はA層のみではなくB層やC層にも広がっている。米の自給率に層間格差が見られなかったのはそのためである。しかしD層は別である。棚田を保有する世帯数が極端に少なく，米はもちろんのこと，焼畑からのメイズやアワを加えても食糧を自給できない世帯も多い。そのような世帯の一部は教会やA層農家からの直接の食糧贈与によって何とか糊口を凌いでいる。

農地の保有とそれに基づく農業所得に関しては，上位3層間ではA層とC層の間に有意な差があるが，隣接する階層間の差は有意ではない。これに対し，D層は上位3層のいずれとも有意な格差が見られた。A層とB層の農業所得が高いのは，棚田と常畑の保有面積が大きいためである。またC層とD層の農業所得の差は棚田からの所得の差が大きい。農業だけで見るならば，戦後に少しずつ造成されてきた棚田が，階層間の経済格差の決定要因となっているようである。

しかし農業所得の割合は世帯所得の半分程度である。人口増加と商品経済の進展の中で山村に住み続けるには，「環境にやさしい」棚田や「森林の再生産を遵守する」焼畑に頼っているわけにはいかない。村内での畜産や農業雇用労働，村周辺での様々な賃労働や希少森林資源の採取など，いろいろな「兼業」が必要である。その極端な形態のひとつが海外への出稼ぎであろう。もともとインド国境に近いチン州の村々では，ミャンマー経済が斜陽に向かう60年代後半

からミゾラムへの出稼ぎが始まったが、90年代後半からはマレーシアへの出稼ぎがブームとなっている。そこで得た所得は、大型家畜の購入、ハカの町での家屋や倉庫の建築、高利子での貸付金などに向けられ、それがまた新たな所得を生むことになる。マレーシアへの出稼ぎ者を最も多く出しているのがA層で、以下B層、C層と順次これに続く。マレーシアに家族を送る資金を用意できる、すなわちそれだけの信用力のある有力者が、マレーシアで稼いでさらに富裕になっていくという構図である。しかしD層からもマレーシアへの出稼ぎ者が出ていることに見られるように、かの地で一発当てれば村に帰って一気に有力者層にのし上がれる可能性もある。マレーシアへの出稼ぎは、階層を固定化し強化する可能性と階層を流動化させる可能性の相反する二つの可能性を秘めているのである。またインドへの出稼ぎや家畜の密輸も、マレーシアへの出稼ぎほどではないにしても、下位層にとっては同様の可能性を持っている。いずれにしても、この出稼ぎが今や村の社会経済階層を決定する主要因となっていることに疑いの余地はない。

階層関係は消費経済すなわち山の資源利用にも影響を及ぼしている。マレーシアやインドへの出稼ぎを契機にかの地に定住してしまう者や、帰ってきても村には帰らず町で商売を始める者がかなりいるが、これは土地への人口圧を軽減する効果がある。しかし村に帰ってくる者が焼畑の常畑化や家畜の大量飼育を始めると林地や草地への負担が増加する。資源利用に関しても出稼ぎは両義性を持っているのである。

また薪炭材の利用についても階層間の相違が存在する。米を自給できない階層が主食または補助食とするメイズの調理には米の2倍の薪が必要とされている。すなわち、米食への移行は食の嗜好ばかりでなく薪炭材利用の軽減のためにも望ましいことである、と村人は考えている。可耕地が減っている焼畑の代替というだけでなく、棚田の開発はこうした観点からも森林資源の利用と密接な関係があるのである。さらに夜間の照明も森林資源が頼りである。松脂のために大量の松が切り倒されていて、すでに村の周辺に松はなく、これを得るために村人は少なからぬ時間と労働を投下しなければならない。村のルージーを中心に、政府やNGOからの借入金で棚田の開発や村の電化計画が現在進行形で進められており、出稼ぎで得た収入の一部がこれに投下されている。このような側面でも出稼ぎは山村の経済と生態環境に関係しているのである。

参 考 文 献

- 酒井敏明. 1983. 「風土と地理」『もっと知りたいビルマ』綾部恒雄・永積昭（編），39-69 ページ所収. 弘文堂.
 高橋昭雄. 1999. 「ミャンマー——困難な市場経済化への移行」『アジア経済論』原洋之介（編），295-323 ページ所収. NTT 出版.
 ————. 2000. 『現代ミャンマーの農村経済——移行経済下の農民と非農民』東京大学出版会.

高橋：焼畑，棚田，マレー・コネクション

- . 2004. 「東北ミャンマー（ビルマ）山間地における棚田の経済的存立構造と資源管理」『東京大学東洋文化研究所紀要』146（12月）：1-44（309-352）.
- . 2005. 「ビルマ（ミャンマー）の山村経済と資源利用」『季刊 公共研究』2(1)：23-32.
- . 2006. 「ミャンマーの棚田と山村経済」『棚田学会誌——日本の原風景・棚田』7：10-23.
- myanmà sai'pyôuyêi lou'ngân [ミャンマー農業公社]. 2003. hâkhâ myòne ì 2003-2004 khuhni'leya kandà hsaunywe'hmù akyeianeì tinpyàje' [ハカ郡における2003-2004年度の農業分野実績報告書]